

2023年度  
入学試験問題

国語

2月1日 午前

| 受験番号 | 氏名 |
|------|----|
|      |    |

中村中学校



問題は次のページからです。

□ 次の(1)～(10)の——線のカタカナを漢字に直して答えなさい。

- (1) スンゼンでとどまる。
- (2) ゴカイしないでください。
- (3) 砂浜でサンランするウミガメ。
- (4) 今後の政治のホウシンを決定する。
- (5) この薬は食前に飲むとコウカ的である。
- (6) シキンきよりからさつえいする。
- (7) 学級ニツシに記入する。
- (8) 布を青くソめる。
- (9) ガラスをワる。
- (10) 切りカブにある年輪。

② 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

(設問の都合上、本文を改変、省略したところがあります。)

\*字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

初対面の相手と親しくなる場合、とても大切なことの中に、どんな自己開示ができるかという問題があります。「自己開示」とは、難しくひびくかも知れませんが、心理学用語で自分の人生カ<sup>A</sup>ン、あるいは自分におきた出来事について相手に伝え、自分の心を相手に文字どおり開き示していくということ<sup>5</sup>を自己開示と呼びます。

ちよつと想像すれば、誰<sup>だれ</sup>のまわりにも何人かはこんな①タイプの人があるでしょう。たとえば、「心配そうな顔をしていますが、どうかしましたか」と声をかけると「ベつに」と言う。「あなたが一番好きな食べ物は何ですか」と言うと「ええと」と答えたまま。「昨日はどちらへ」と言えば、「ちよつと野暮用<sup>やぼよう</sup>でちよつとしたところへ」。「これからどんな本を読みたいのですか?」「さて、そのう」。

10

「あなたのご両親は偉<sup>えら</sup>い方だったのでしようね」と聞けば「さほどでも」という具合に、なにを聞いてもつかみどころのない、まるでこん<sup>※</sup>にやく問答をしているような相手がいます。

こういう人に対しては、誰しも自分のほうから親しくなろうなどとは思わないものです。相手があんなにも自分の心に鎧<sup>よろい</sup>を着せて、がんじがらめに武装しているのだから、こちらから何もそんな相手に近づいていってやる必要はない。そんなエネルギーをこちらだけが使つてやるのはばかばかしい、と思うのが人の常<sup>ア</sup>というものです。

そこで、ほどよく自分について相手に伝えていく。つまり、適度な自己開示というものがぜひ必要になってきます。さて、では失敗しない自己開示とはなんでしょう。これには三つの条件があります。

まず第一は、もつとも想像がつきやすいところですが、自慢<sup>じまん</sup>はだめということです。自分はこんなに偉い人間で、こんなにすごいことをしたのだ。昨日も一昨日も、ロー<sup>※</sup>ルスロイスに乗って一流ホテルに泊<sup>と</sup>まってきた、などと

30

25

20

15



です。

それは、( B ) 話ほど ( C ) 表現の仕方をする、  
というポイントです。たとえば、自分が小さい時ひどい  
虚弱児きよじやくじで貧乏びんぼうであつたとか、自分は小さい時に成績が悪

70

く、小学校では廊下ろうかに立たされてばかりいたとか、いじ  
められていつも泣いていた、という話をする場合に、こ  
の瞬間しゆんかんもその過去の出来事によつて嘆きなげの底にいろとい  
わんばかりの、まるで貧乏神のような顔つきをして暗い  
トーンでいうと、聞いた相手も気が重くなります。

75

明るくはきはきと生気に満ちていることこそ、最高の  
パフォーマンスの条件ですから、暗い話をする時はむし  
ろ明るい口調で、「もう済んだことですが、こういうこと  
がありました」とか、「あの苦労体験のおかげで今は強く  
なりました」というように、必ずプラスの要素をつけく  
わえる言い方をしなければなりません。つまり、ネガテ  
イブな内容はポジティブな表現をするということにつぎ  
るのです。

80

以上の三点を守れば、どんな自己開示も、相手に心を

85

開かせる作用をもたらします。三点を守った上でほどよ  
い自己開示をして、相手との距離きよりをぐっと縮めること。  
これが、初対面のパフォーマンス成功のコツだといえる  
でしょう。

(佐藤綾子『自分をどう表現するか パフォーマンス入門』

講談社)

※こんによく問答……うまくかみ合わないやり取り。

※ロールスロイス……外国の高級車。

※辟易……いやになること。

※卑下……自分をあえて低い位置に引き下げること。

※浅学非才……知識も才能もない人。

問一 〓 線Aの「カン」と同じ漢字を使うものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア、満足カン

イ、カン光バス

ウ、カン接的

エ、図書カン

問四 〓 線A「常」、イ「類」のここでの読みをひらがなで答えなさい。

問五 (1) (4) に入る語を次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア、つまり イ、しかも

ウ、しかし エ、たとえば

問二 〓 線①「こんなタイプの人」とありますが、それはどんなタイプの人ですか。「人」につながるように、十六字でぬき出しなさい。

問六 〓 線③とありますが、この「しんどさ」を本文中の言葉を用いて二十字以内で説明しなさい。

問三 〓 線②「さほどでも」の後に省略されているのはどのような表現だと考えられますか。ひらがな五字で答えなさい。(句点は数えない。)



問七 ———— 線④について、には対照的な二字

の熟語が入っていました。それを考えた上で、

——— 線④全体を自分の言葉で説明しなさい。

問八 (B)、(C)には反対の意味の言葉が入ります。

それぞれ本文中から探して答えなさい。

問九 ———— 線⑤「ほどよい」と同じ意味の二字の熟語

を、本文中から探して答えなさい。

問十 次のア、オについて、本文の内容に合っていればA、

違ちがっていればBを解答らんらんに記入しなさい。

ア、相手が誰であろうとネガティブな話はしない方がよい。

イ、「自己開示」は必要だが、ゆきすぎないようにすべきである。

ウ、「謙遜」することは昔の日本ではよいこととされていた。

エ、なぐさめてほしいかどうかは話し手が決めることである。

オ、苦労話というものは相手との距離を縮めることも多い。

三 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

(設問の都合上、本文を改変、省略したところがあります。)

\*字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

小学五年生の島谷雪乃しまたにゆきのはいじめが原因で学校に通えなく

なり、父の航介こうすけと共に長野県にある父の実家に越こしてきた。

祖父母はすでに亡なく、曾祖父母そうそふぼの茂三しげぞう・ヨシ江夫婦えふうふ(シゲ爺じい

・ヨシばあば)が農業を営いんでいる。父の幼なじみである広ひろ

志しの息子大輝むすこだいきは雪乃と同じ年で、病氣療養りょうよう中の母と離はなれ

て暮らしている。大輝は、転校しても一度も学校に来られな

い雪乃を心配し、仲の良い賢人けんと・豊ゆたか・詩織しおりを連れて学校帰

りに雪乃の家を訪おとすれた。雪乃は、大輝に対して内心「勝手

なことをした」とむっとして、話もせず納屋なや(物置小屋)に

こもる。それを大輝がとりなす場面である。

「今日連れてきたあいつらも、初めのうちだけはそういう感じかもしれない。たぶん、クラスのみんなもさ。けどほ

んど、すぐだから。俺おれの最初ん時とおんなじで、ほんとにすぐ、雪つぺが全然ふつうだつてわかるから。だからさ、

それまでの間だけは、大目Aに見てやってよ」

雪乃は、ぽかんとした。また不思議な言葉が飛び出したものだ。

「……大目に、見る？」

「そう」

大輝がふと、複雑な面持ちおももで笑う。

「今はもうそんなでもないけど、前はさ。俺がガッコで何かやらかすたんびに、じいちゃんや父ちゃんがそう言つて先生あやまに謝あやまつてたんだ。『男手おとこばつかで育ててるもんで行き届かないところはあつたでしょうが、どうか大目に見てやって下さい』つて」

雪乃は、大輝の母親のことを思った。彼かれがへガッコで何かやらかす子どもだつたのは、実際、寂さびしさのせいもあつたのかもしれない。

「雪つぺもさ。クラスのみんなが雪つぺのことをわかるま

で、ちよつとだけ大目に見てやってよ。それまでは、俺ら20  
がちゃんといつてゐる。だからさ……」

大輝は、1 思いきつたように言った。

「だから、明日から一緒にガッコ行こうよ」

雪乃は、ぎよつとなつて目を上げた。

「明日から？」

思わず声が裏返る。

大輝が、首を大きく上下させてうなずく。自分がどんな

無茶なことを言つたかなんて、全然わかつていない感じた。

雪乃は茫然と目を落とした。ひんやりとした納屋の地べ

たには、さつきの藁屑。大輝が運動靴の先でいじりたお

したせいで、泥だらけのよれよれだ。

「そんな……無理だよ、明日からなんて」

「なんでさ。ランドセルしよつたらすぐ行けるじゃん」

「そういうことじゃなくて。だって、いくらなんでも急つ

ていうか」

「急じゃないよ。時間はめちやくちやあつたじゃんか。去

年の秋ぐらいから行ってないんだろ？ ガッコ休んだの、

夏休みでいつたら何回ぶんだよ」

大人なら腫れ物に触るみたいにして言わずにおくこと

を、大輝は遠慮の欠片もなくずばずばとぶつけてくる。

——いや、そうじゃない。雪乃は思い直した。大輝は、

2 遠慮していた。何か訊きたそうにすることは

あつても、3 口に出さなかつた。なのに、それ

こそ急に、こちらの知らない友だちを連れてきて、明日か

ら学校へ来いなんて言う。むちやくちやだ。

心の中が見えたのだろうか。

「ごめん」

今日初めて、大輝が謝つた。

「俺……なんかやつぱちよつと、間違えちやつたのかな」

雪乃は黙っていた。気まずさに顔を上げられない。

すぐ目の前で、泥で汚れた運動靴が向きを変える。納屋

を出ていく後ろ姿を、膝を抱えたまま、目の端で見送る。

あんなふうに言われてしまうと、悪いのはこちらである

かのような——<sup>①</sup>あの子たちに申し訳ないことをしたよう

な気がしてくる。いったいなんだって、こんな気持ちにさ

せられなくてははいけないんだろう。腹立たしさと寂しさと、戸惑いや後悔こうかいや、何もかもが入り混じって、どうすればいいかわからない。

大輝が入ってきてまた出ていった納屋の入口が、すつきりと明るい。西陽の射す反対側の開口部ほど眩まぶしくはないけれど、中が暗いぶんだけ穏おだやかに光って見える。

その四角な光がふと半分くらい遮さえぎられ、誰か人が立ったのがわかった。長靴ながぐつを引きずるようにして近づいてくる。

「せっかく心配して来てくれた友だちを、追い返しちまっただかい」

茂三が低い声で言った。

「大ちゃんがそう言ったの？」

「だれえ、あいつがそんな泣きごと言うもんかい。ちよつと見りゃわかる」

「どうして」

「玄関入げんかんつてく肩かたが、がくーんとしよげて下がってたに」

雪乃の脳裏のうりに、その姿がありありと浮うかぶ。勝手なことをするからいけないのだ。こちらは悪くない。

70

お尻しりがだんだん冷えてくる。藁わらの上に座すわっていても、その下の地面が冷たいからだ。

「今朝、あいつが畑へ来たのはこういうことだっただな」  
よつこらせ、とシゲ爺がすぐそばの青いトラクターの前輪こしに腰を下ろす。

「ランドセルしよって息切らして走ってくつから、いったい何があつたかと思つたらほー、わざわざお前の都合を訊きに來たつてわけかい。律儀りちぎなやつだに」

「知らないよ。都合なんか訊かれてない」

雪乃は口を尖とがらせた。

「だけんが雪坊ぼう、学校の帰りに寄りたいたなら好きにすればいいつて、おめえが言つたんだに」

「それは、大ちゃん一人だつて思つてたからで……友だち連れてくるなんてひと言も言わなかつたじゃん。なのに、ヨシばあばとブドウ畑から帰つてみたらもう勝手に上がり込んでさ。家に上げたのだからあたしじゃないもん」

「そうだな。家に上げたのは、俺だ」  
驚おどろいて見やる。ごつごつとしたタイヤに腰かけた茂三

90

65

60

75

が、真顔で雪乃をじつと見おろす。

「勝手に上がり込んだんじゃねえだよ。大輝のやつは、みんなして外の縁側えんがわで待ってるつつただわ。それを、いからまあ上がっておやつでも食っててくんなって勧めたすすのはこの俺だに」

② 「なんでそんなよけいなこと」

「よけいな、こと？」白っぽい眉まゆが、ぎゅつと真ん中に寄る。「なんでって、雪乃。そんなこともわかんねえだか」

「……だって」

I

「嬉うれしかったからだわ」

雪乃は、どきつとした。

「涙なみだが出るほど嬉しくって、ほんつとうにありがたかったからだわ。ああして大輝が、仲良くなったおめえを心配してわざわざ友だちまで引っぱって来てくれたってことが

——それも、誰かに言われたとかじゃねえに。自分の頭で考えてそうしてくれたってことが、この爺おやさんは、ほー、そりゃあもう嬉しくってない。それだもの、家に上げたの

はよけいなことでも何でもねえ。あの子たちへの、せめてもの気持ちだわ」

II

膝をきつく抱えて黙りこくつっていると、納屋の大きな梁はりのどこかで、みしりと木の軋きしむ音がした。西側の出入口の向こうのほうから、キョツケイ、とキジの鳴く甲かんだか高い声が聞こえる。オスがメスを呼んでいるのだろうか。

と、母屋おもやの土間のあたりが少し騒さわがしくなった。子どもたちの話し声に、航介の声と、そしてヨシ江の笑い声が入り混じる。父親はあれからずっと彼らの相手をしていらしい。

たたつ、と運動靴の足音がして、入口から大輝の顔のぞが覗いた。

「じゃあな、雪っぺ。宿題あるし、帰るわ」

III

のだろう。へごめんやへありがとうはもちろんのこと、おんなじへじゃあねへすらうまく出てこない。

「雪乃」

びっくりして、茂三をふり返る。いま、雪坊じゃなく、雪乃、と呼ばれた。

130

「そのへんまで、みんなを送ってけ」

「え」

「わざわざ訪ねてきてくれた相手に礼を尽くすのは、人としてあたりまえのことじゃあねえだかい」

そう言われてしまうと、ますます反論できない。

135

雪乃は、抱えていた膝をほどき、のろのろと立ちあがった。お尻に付いた藁屑はらを払い、大輝のほうを見ると、彼のほうは話の成り行きが見えないせいで、きよとんとこつちを見ている。

思いきって近づいて行き、そばをすり抜けるようにして

140

納屋から出る。冷えた身体を蒸し暑い空気が包み、キチがじゃらじゃらと鎖くさりを鳴らすと同時に、玄関の土間から子どもらが出てきた。

ばう、ばう、とキチが吠える中、賢人も豊も何やら微妙

145

な顔で雪乃のほうを見る。わずかに遅れて、詩織も出てき

145

た。

「あ、島谷さん。おじやましましたー」

おじやま、というのが嫌味いやみなんかでないことは、雪乃にもわかる。かろうじて首を横に振ってみせると、詩織はほつこりと笑った。

「そこまで一緒に行くつてさ」

と、大輝が言う。

それこそ勝手なのに、ほつとした。

(村山由佳『雪のなまえ』徳間書店)

問一

線A・Bの語句のここでの意味を次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

A 大目に見る

ア、子どもが大きくなるまでよく面倒めんどうを見る。

イ、大勢の中で成長していく様子を見守る。

ウ、かたよらないよう公平に見て判断をする。

エ、人の悪いところをむやみに責めずゆるす。

B 腫れ物に触る

ア、怒りいかを買ってしまう。

イ、おそろおそろ接する。

ウ、共感をよびおこす。

エ、不快な気分になる。

問二

1

3

に入る適切な語を次から

それぞれ選び、記号で答えなさい。

ア、めったに           イ、なるほど

ウ、ひとときわ       エ、ずっと

問三

——線①とありますが、この時の雪乃の気持ち

として適当でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、大輝のつた思いきつた行動に動揺どうようし、自分がど

のようにふるまえばよかったのか分からなくなっている。

イ、自分は悪くないと思いながらも、学校に行こうと

誘さそってくれた大輝の気持ちに応えなかったことをくやむ気持ちが出てきている。

ウ、ここまで言われたら学校に行つて、大輝のおせっかいぶりをみなに言つてやろうと思いはじめている。

エ、自分のことを考えて行動してくれた大輝に謝られたため、学校に行かない自分を、自分自身で責める気持ちが出てきている。

問四

——線②とありますが、この時の茂三の気持ち  
を述べた次の文の空らん適切な言葉を入れて文を  
完成させなさい。ただし、   
については本文中から指定の字数でぬき出して入れ、  
 については適切な言葉を自分で考えて入  
れること。

大輝たちを  (五字)  (六字) と

決めつける雪乃に対して、心配して来てくれた大輝をね  
ぎらうのは当然だ、言われなければそれもわからないの  
かと  思う気持ち。

問五

に入る適切な文を次から  
それぞれ選び、記号で答えなさい。  
ア、それはちよつとちがう。  
イ、返す言葉がない。  
ウ、茂三が、ふーつと、深くて長いため息をつく。  
エ、すごい。いつもと態度が変わらない。

問六

——線③とありますが、この時、茂三がいつも  
とはちがう呼び方で雪乃を呼んだ理由を二十五字以  
内で答えなさい。

問七

この文章の後、雪乃と大輝たち四人はどのような  
つていくと思いますか。雪乃と大輝、それぞれの気  
持ちを記した上でまとめなさい。



以下、余白です。